



他者のために祈る

人文社会学部長
日本学科 学科長 教授

南谷 美保

私は、小学校から中学校2年生までイギリスで過ごし、日本の中学校に相当する学年は、ロンドン郊外の小さなカトリック女子修道院に付属する学校で、シスターたちに囲まれて学んだ。毎週チャペルで行われるミサ、これは、本学に同じく授業として実施されていたが、それに参加するために、修道院の回廊を歩く時に感じた石造りの建物の冷たさや空気の特徴の香りを、今でも懐かしむことがある。

男子禁制の学校で、教員も女性のみ、そのほとんどがシスターであり、シスターたちからは勉強以外にも多くのことを学んだ。その中の一つに、ふとした折に、ありありとその場の光景が再現されるかのように思い出すものがある。

のどかな郊外にあった学校ゆえに、その近辺を緊急車

両が通るなどということは、めったになかった。ところがある日、珍しく救急車のサイレンが近づいてきて、学校の前の道路を通り過ぎた。その時、授業をされていたシスターは、授業を中断して、その場で祈りをささげた。見ず知らずの他者のために祈るその姿は、最初、私に驚きを与え、そして宗教者として生きるとは、こういうことなのだと感動を与えた。

私は、その後、日本に戻り、紆余曲折を経て、得度も受けることとなって、今では仏教徒として生きている。が、この時に感じた気持ちは、今でも忘れられない。誰しも、自分のために祈ることはできる。自分の親しい誰かのために祈ることもできる。が、知らない誰かのために祈ることは難しい。

しかし、今の時代にごそ、そうした気持ちを持つことが必要になっている。

四天王寺大学では、「利他」の教えを学ぶことを重視しているが、他者のために祈る気持ちを持つことは、その基本なのではないだろうか。自分の幸せだけを願うのではなく、見ず知らずの誰かのためにもその幸せを祈る、そうした気持ちを持って日々を送りたい。



仏教は支え合いの教え

人文社会学部 人間福祉学科
健康福祉専攻 准教授

上續 宏道

仏教は、縁起の思想、つまり持ちつ持たれつ互いに支え合い、人格の完成というさとりを目指す教えであるといえます。

大乘仏教には「一切衆生悉有仏性」というひとつの考え方があります。これは、涅槃経いっさいしゅじょうしつうぶつしょうというお経の中に出てくる言葉で、「一切の衆生ねはんぎょう(生きとし生けるもの)には仏になる素質がある」ということです。仏性については様々な捉え方がありますが、ここでは仏になる可能性や潜在能力を指します。この「一切衆生悉有仏性」というのは、言い換えれば、「生きとし生けるものには皆、仏のいのちがある」、

「仏のいのちをいただいて生きている」ということを意味しています。つまり、単独で存在するものは何もなく、相互に関連しあって成り立っているという考え方に立ちます。

人間も生まれてから死ぬまで絶えず誰かのお世話になっており、他者の協力なしには生きられません。したがって仏教では自分が強い者であるということはいまません。

一方、我々は皆、自分のことばかりに心をうばわれ、自分を中心に何でも思い通りに動いて欲しいという煩惱におおわれた弱い存在でもあります。それゆえに仏になり、あるいは仏の力を借りて生きていくことを説いています。仏教はそうした弱い者の立場に立ち、共に生きていこうという思想をもっています。

このように仏教は、仏という大いなるいのちの世界で生かされ、いのちを分かち合うもの同士の平等と、互いにいのちを尊重し合う生命の尊重をその基本精神にした支え合いの教えということになります。

礼儀について

本学非常勤講師
裏千家茶道教室 白露菴主宰

藤井 公三



お辞儀(礼)とは

よく「礼に始まり、礼に終わる」と言います。「道」のつく習い事では、最初に「お辞儀・挨拶の仕方」を習います。

茶道でも最初にするのがお辞儀の稽古です。茶道では、畳に座っている「座礼」と立っている「立礼」とがあり、三段階のお辞儀の仕方「真の礼」「行の礼」「草の礼」があります。これは書体の楷・行・草にあたり、「真」は心をこめて深く一礼する姿、「行」は少し軽くする姿、「草」は会釈でいどにする姿です。姿は違いますが、しかし「気持ち」は同じ心で行います。

私が先ほど「皆さん、こんにちは。よろしくお願ひします」と言いながら一礼しました時、ほとんどの方が私より早く頭を上げられたのではありませんか。それは、皆さんが心の中や言葉に出して「先生、こんにちは。よろしくお願ひします」と言っていないからではないですか。後ほどもういちど礼を致しましょう。その時は、心の中または言葉に出して一礼してくださいね。

心の中や言葉に出してされたお辞儀には、心がこもり、その方の人格や人柄も表われます。かつて、あるジャーナリストと裏千家の先代家元とが対談を致しました。最初に挨拶を交わされた時、先代家元が丁寧にお辞儀をされたのを見て、そのジャーナリストは、自分が手を挙げただけで済ませた不作法を恥じたそうです。彼は先代家元の人格や人徳にふれ、自身を恥じて反省したのでしょう。

お辞儀ひとつに、その方の人格・人徳が表われます。皆さんも近い将来、就職活動の面接や、社会人になって人とお会いする時などは、言葉に出さなくとも、心の中で「こんにちは」「初めてお目にかかります」などの挨拶の言葉を言ってお辞儀をしてみてください。そのお辞儀ひとつが、相手に好印象を与え、自分自身にもプラスになり役立つと思います。

今の私どもの家元・千宗室は「型と形のちがいをよく言われます。「型だけでは心がこもらず、気持ちも伝わらない。その中に血を流してこそ初めて型が形になるのですよ」と。お辞儀だけでなく、動作ひとつ所作ひとつでも同じことが言えます。茶道はお客様にお茶を差し上げるのに点前をしてお茶を点てます。一つひとつの動作・所作に心をこめます。茶道具を清め、自分自身の心を清め、その点前を見ているお客様の心も落ち着かせます。それには日夜、茶道の稽古に励み、型だけでなく形になるようにする、それが稽古というもので、本当の「おもてなしの心」だと思います。

茶道の精神「和敬清寂」の教え

「和敬清寂」の教えは、古くは中国宋代の劉元甫の著『茶堂清規』に見え、私どもの流祖・千利休が今に伝えました。室町時代の茶道は「茶の湯」というただ抹茶を飲む遊びでしたが、やがて「寂び侘び」という思想が生まれ、「茶の湯の和風化」が起こります。奈良の僧侶で茶人の村田珠光が「心のこもった茶」を始められ、「茶の心・精神」を重んじました。その流れを汲む千利休が侘び茶を大成して「現代の茶道の姿」があるわけです。

「和敬清寂」とは「亭主と客とが心なごやかにお互いを敬い、茶室・茶道具などに清楚で質素を心がけること」となりますが、その言葉一つひとつに深い意味があります。茶道の稽古に励み、その心を理解し実践できて茶人は一人前ですが、それはなかなか難しいことで、仏教でいう「悟りを開く」と同じです。

「和」とは、四天王寺大学の建学の精神、聖徳太子の「和を以て貴しとなす」と同じです。人との和はもちろん、自分自身との和でもあります。茶会・茶事での茶道具の取り合わせの調和、自然世界と仲良く向き合う和、すべてに当てはまる大事な言葉です。「敬」とは、相手を敬う心を持つ、両親・兄弟姉妹、師弟の間、友人どうし、相手の長所を見て敬うことです。そうすればイジメの問題も起こりません。この「和」と「敬」は、自分自身の教えであり、また相手に対しての心であり、もてなしの心の原点でもあります。

「清」とは、清らかな心を持ち、茶道具や周りの物を清潔にし、同時に物事を新鮮な心で見なさいということ、自然の景色を見てきれいだなあという心を育み、感性を磨きなさいということです。「寂」とは、不動の心を養い、突発的な事が起こっても動じずに対処しなさいということです。禅語にも「平常心は道」とあります。言うのは簡単ですが、イザとなるとなかなか出来ません。日々の稽古を積み、実践できるように修行します。茶道は人としての修養そのものです。この「清」と「寂」の精神は、自分自身の心の持ち様を言っています。

これからの茶道の役割

よく「礼儀をわきまえる」と言いますが、「常識をわきまえる」と同じです。その「常識をわきまえる人」を育てる役割は、精神性の高い仏教の教えとともに、私どもの茶道が担っていると思います。

皆さんには、これからの人生、苦しいこともあるでしょうが、その時は人生を前向きにとらえ、自覚を持って短絡的な行動に走らずに、いちど心の中で咀嚼して行動してほしいです。皆さんが楽しい有意義な大学生活を送られることを祈念いたしまして話を終わります。では最後にいっしょに礼を致しましょう。本日はありがとうございました。

この文章は6月26日の「仏教1」で行われた藤井公三先生のご講話をもとに構成したものです。
(本欄編集 矢羽野 隆男)

ウパーヤ学生編集員の活動が始まりました

本誌「ウパーヤ」はこれまで、仏教文化研究所の研究員が編集にあたり、記事の執筆も教員を中心に進めてきましたが、今号から学生編集員を募集して学生の皆さんにもより積極的に参加してもらうこととなりました。

応募してくれた学生編集員のメンバーには、まず本号第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる-法隆寺」の執筆をお願いしました。執筆のために法隆寺をはじめとする斑鳩の寺院取材し、その活動の様子も本学公式ホームページで紹介されています。いずれも学生

編集員の皆さんの執筆ですので、ぜひご覧ください。

今後も本誌の編集・執筆に、学生有志の参加をお待ちしています。仏教の教えや寺院・仏像などに関心のある方は、第4面下に記載の研究員やE-mailを通じて連絡してください。

(矢羽野 隆男)



第5回 卒業生インタビュー

話し手： 山田 由佳（やまだ ゆか） 平成24年3月 教育学部教育学科小学校幼児教育コース卒業
大阪市立小学校教諭
聞き手： 桃尾 幸順（仏教I・II 講師・日本学科講師・本欄編集）

礼拝の時間の価値

1、2回生の礼拝は心を落ち着けることができる時間でした。スーツを着ることも最初は面倒だと思いましたが、週に一回の習慣になりましたし、瞑想の時間も次第に普段の悩みや考えを一回忘れて、ゆっくり心を鎮める時間になりました。今の仕事は小学校勤務なので子どもを相手にしてあまり心が休まる時間がないのですが、心を落ち着けたいと思うときは大学での瞑想を思い返したりすることがあります。小学校ではまだ3年目で低学年しか担当したことがないので、心を落ち着けることの重要性などはまだわからないでしょうから、そんな話ではできていないのですが、自分のためにはたまに瞑想を行っています。2回生になると写経が始まりましたが、もともと筆で字を書くことは好きだったので、楽しかったです。写経に集中することは、いろいろな悩みやいやなことが一瞬遮断されて、気持ちを切り替えることにもつながりましたし、楽しい、良い時間を過ごせたと思います。

仏教の時間は、あの大きな大講堂で1学年全員が集まり、同じ時間を共有することがすごいなと思いました。最初こそ多少の違和感はありましたが、今となってはあの一体感が大切なのだということがよくわかります。

心を落ち着けることの重要性は社会に出た時に強く感じました。最初は先輩教員を見習ってがむしゃらに仕事をする中で、頭がいっぱいになって、限界を感じることもあったのですが、そういう時に心を落ち着けて冷静に判断し、無理をしないで行動できたことはとてもよかったと思います。

教師の仕事について

教師の仕事は楽しいですね。もちろんしんどいところもありますが、私が頑張れば頑張るほど子どもたちのよい反応が返ってくるので、それが楽しいですしやりがいがあります。子どもたちの楽しそうな顔を見ると、頑張ってよかったと思います。また特に子どもたちを叱る際には怒りの感情をコントロールして冷静にならなければならないと思います。常にそう考えてはいるのですが、実施にはイラッとすることも多く、その際は冷静にならなくてはならないと自分に言い聞かせています。大学で仏教を学んで実践していたという自信が、感情をコントロールする際に役立っていると思います。

私が担当したのは、1年目が2年生で、2年目が1年生、3年目の今年はまた1年生です。特に1年生は自分たちで出来ることが少ないので大変です。しかし教えたことに対してとても興味を持ってくれたり、ちょっとしたお手伝いなども大好きだったりするので、その点ではやりやすいです。

去年までは私が一番新しい先生だったのですが、今年IBU出身の講師の後輩ができました。彼女が後輩であると感じたのは礼拝の時間の話がきっかけです。そういえば昨年までおられた先輩の教諭がIBUの先輩であると気付いたのも礼拝の話がきっかけでした。礼拝はIBU独自の取り組みなので、その話をするのは同窓生に出会うきっかけになると思います。

学園訓について

「礼儀」は低学年にも高学年にも必要なものだと思います。まずは大きな声で明るく挨拶をすること、返事をはっきりと言うこと、他の先生などにお世話になったらお礼をしっかりと言うことを重点的に指導しています。これはことあるごとに注意しているのですが、1年生は言われたことはちゃんとやるという意識はありますので、ゆっくりと身に付いているようです。子どもたちが礼儀正しく行動できていると、他の先生たちが教えてくれることがあるのですが、そういうことを聞くこともとてもうれしいです。

「和の精神」については、まだ子どもたちは「自分が、自分が」という時期なので、徐々に皆で遊ぶ時間を作り、「皆で遊ぶのもっと楽しい」ということを実感させることで、身に付けさせてゆきたいと思います。先生間の和も大切で、特に1年生担任の3名の教員は頻りに話し合いをして情報を共有し、アドバイスを合っています。

「誠実」については、子どもたちに嘘つきは嫌いですということをいつも言っています。あるいは「ごめんね」と謝ることの大切さを教えたり、信用の大切さを教えたりして言います。

「健康」に関しては、自分としてはなるべく早めに休むこと、体調が悪ければ早めに医院に行くことなどを心掛けています。1年目は子どもたちの流行病がうつったりもしてしたが、2年目以降は体調を崩すこともなく元気にやれています。

在学生へのメッセージ

まず私は、IBUに来てよかったと思います。良い先生方が多くて、話もよく聞いてもらえましたし、同級生や、先輩、後輩にも恵まれました。クラブはわくわくサタデーに入っていました。そこでの経験も自分のためになったと思います。

仏教に関しては面倒だと思うこともあるでしょうし、眠いかもかもしれませんが、授業を受けるといういろいろなことが見えてきますし、1学年全員が集まるのは仏教の時間だけです。真剣に受けてほしいです。また4年間はあっという間に過ぎ去るので、新たな出会いを大事にすれば、その後の人生が変わるかもしれませんので、積極的にいろいろなことに参加してほしいです。特にクラブやサークル、ボランティアに関しては興味があれば参加してほしいです。もしその団体が合わなくても次があります。そして私は教育学部しか知らないのですが、先生を信頼してついていけば大丈夫なので、是非そうしてください。



平成26年度 夏学期「仏教I」 講話題目

- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 4月10日 | 桃尾 幸順先生「礼拝説明・授戒オリエンテーション」 | 6月5日 | 原 祐子先生「仏教聖歌 一声を合わせて歌うよるこび」 |
| 4月17日 | 学長 西岡祖秀先生「建学の精神 -『ところえ手帳』に寄せて」 | 6月12日 | 久家 英述先生「仏教と教育」 |
| | 矢羽野 隆男先生「受講ころえ -授業規律に関して」 | 6月19日 | 源 健一郎先生「開経偈 -出会い(縁)の不思議 -」 |
| 4月24日 | 毛受 矩子先生「学生支援メッセージ」 | 6月26日 | 藤井 公三先生「礼儀について」 |
| 5月1日 | 矢羽野 隆男先生「学園訓 -「和」を実現するために-」 | 7月3日 | 南谷 美保先生「仏様に会おうとは」 |
| 5月8日 | 桃尾 幸順先生「瞑想 一心を整える楽しみ」 | | 楠本 久美子先生&保健教育コース学生(高橋奈々さん、前田奏絵さん、峯昂子さん)「食育 一生活をチェックしてみよう」 |
| 5月15日 | 中井 誠先生&学生(友利健吾さん、吉松将吾さん、小島真琴さん)「カンボジアでのボランティア活動」 | 7月10日 | 藤谷 厚生先生「般若心経 一心を空にして、智慧を活かす」 |
| 5月22日 | 兼子 恵順先生「四弘誓願 一利他の誓い」 | 7月17日 | 上續 宏道先生「回向文-私のためにはあなたのため、あなたのためは私のため」 |
| 5月29日 | 藤谷 厚生先生「懺悔文 一日々の行いを正し、省みる心」 | | |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

— 法隆寺（西院伽藍編） —

奈良市より少し南にいったところにある法隆寺は、JR法隆寺駅から「法隆寺門前駅」行のバスもありますが、徒歩で約20分歩くと風情ある街並みが楽しめます。やがて、見えてくるのが立派な松並木。聖徳太子は三歳の時、父の用明天皇に「桃の木と松の木どちらが好きか」と聞かれ、「松が良い、緑が1000年保ちます」と答えたといひます。それ以来、法隆寺の周りにはたくさんの松の木が植えられたそうです。

法隆寺は607年に建立されましたが、670年に一度焼失しました。その後再建され、世界最古の木造建築として、日本で第一号の世界文化遺産に登録されました。

松林を抜けて、まず目に入るのが「南大門」です。左右におられる素晴らしい仁王像に目がいくかもしれませんが、門の手前、足元に鯛のような形の石があります。これは、法隆寺七不思議の一つの鯛石です。他にも、寺の修築に必要な材木や金銀などが眠っているとされる伏蔵や、五重塔から風神雷神を遠ざけるために九輪につけたとされる大鎌などがあります。七不思議を探しながら散策すると、今までと違った法隆寺が見えてきます。

中門に入ると、右に金堂、左に五重塔があります。金堂におられる釈迦三尊像は、623年に聖徳太子の病中に等身の像として発願されたといわれ、今でもそのお姿を目にすることができます。



南大門前の鯛石

昔は金色に輝いておられたそうですが、現在は金箔がはがれ趣のある青銅色になっておられます。五重塔は、御釈迦様の遺骨が納められた建物です。現在その舍利（遺骨）は夢殿北側の舍利殿に安置されています。



金堂

金堂と五重塔それぞれの南側には礼拝石と呼ばれる平らな石があり、かつて僧たちは堂内には入らず、その石から礼拝したそうです。奥に進むと講堂が見えます。講堂は、僧侶たちが学ぶいわば教室です。中には薬師如来が祀られ、右に日光菩薩、左には月光菩薩が佇まれています。

法隆寺の北端にある八角造りの西円堂にも本尊として薬師如来が祀られています。かつて、法隆寺は仏教を研究する学問寺であったため、庶民の参拝は少なかったようですが、この西円堂には、病に苦しむ民衆が多く訪れたといい、それだけこの薬師如来への信仰は篤かったようです。西円堂の東側にある鐘楼は現在8時から16時までの2時間おきに鳴らされています。正岡子規の有名な俳句「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」に詠まれたのがこの鐘の音です。参拝の際はきくと耳にすることでしょう。

法隆寺の魅力は実際に足を運び、素晴らしさに触れることが一番だと思います。一度はご自身で聖徳太子の愛した土地を歩いてみてはいかがでしょうか。

(学生編集員 松浦華子 田村美咲)

仏教のことば

般若

今日、日本の各宗派では、いろいろなお経が日常誦読されていますが、その中で最もポピュラーなお経として挙げられるものに、「般若心経」があります。般若とは、パーリ語の Paññā [バンニャー] を音写して造られた漢訳語です。このバンニャーは、智慧(ちえ)を意味します。煩惱に汚され

ていない、清浄な叡智であり、私たち各々が本来備えている智慧をさしています。もともと私たちの心の奥底には仏としての智慧があるのですが、残念ながら凡夫の私どもの心には、煩惱(ぼんのう)というものがああり、これが執らわれの心の作用を起こして、智慧の働きを抑えてしまう訳です。それ故、仏教では瞑想の修行をすることで、この煩惱を取り払い、心を浄化し、空の状態に持って行くことで、智慧の働きを活性化させようとするのです。つまり、私どもの心から煩惱の暗雲を払いのければ、そこに自ずから般若の智慧が、みごとに働き輝き出すという訳です。「般若波羅蜜」とは、この仏としての「最高の智慧の完成」を意味する言葉ですが、この智慧の完成こそが、実は大乘仏教での最も重要とされる目標でもある訳です。(藤谷 厚生)

編集後記

巻頭の南谷美保先生の「他者のために祈る」を始め、上續宏道先生の「仏教は支え合いの教え」、藤井公三先生の「礼儀について」は、「他者」の存在に対する明確な認識と、これを基盤とする心と行いのなかに、「人間」としての自己の在るべき姿があることを教えられています。「卒業生インタビュー」に加えて、今号からはウパーヤ学生編集委員の皆さんによる「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の執筆も始まりました。本誌「UPĀYA ウパーヤ」を通じて、仏教をめぐる人々の輪が一層広がり、仏の教えとしての智慧が、日々の暮らしのなかに大いに活かされることを念じます。(K.K)

研究所員紹介

所長 西岡 祖秀(学長・教授)
主任研究員 矢羽野 隆男(教授)
研究員 兼子 恵順(教授)
藤谷 厚生(教授)
源 健一郎(教授)
上續 宏道(准教授)
桃尾 幸順(講師)
南谷 恵敬(客員教授)

UPĀYA(ウパーヤ) 5号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。
平成26年9月1日発行
発行 四天王寺大学
仏教文化研究所 仏教教育センター
所在地 大阪府羽曳野市学園前三丁目2-1
TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611
URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail bukken@shitennoji.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

